

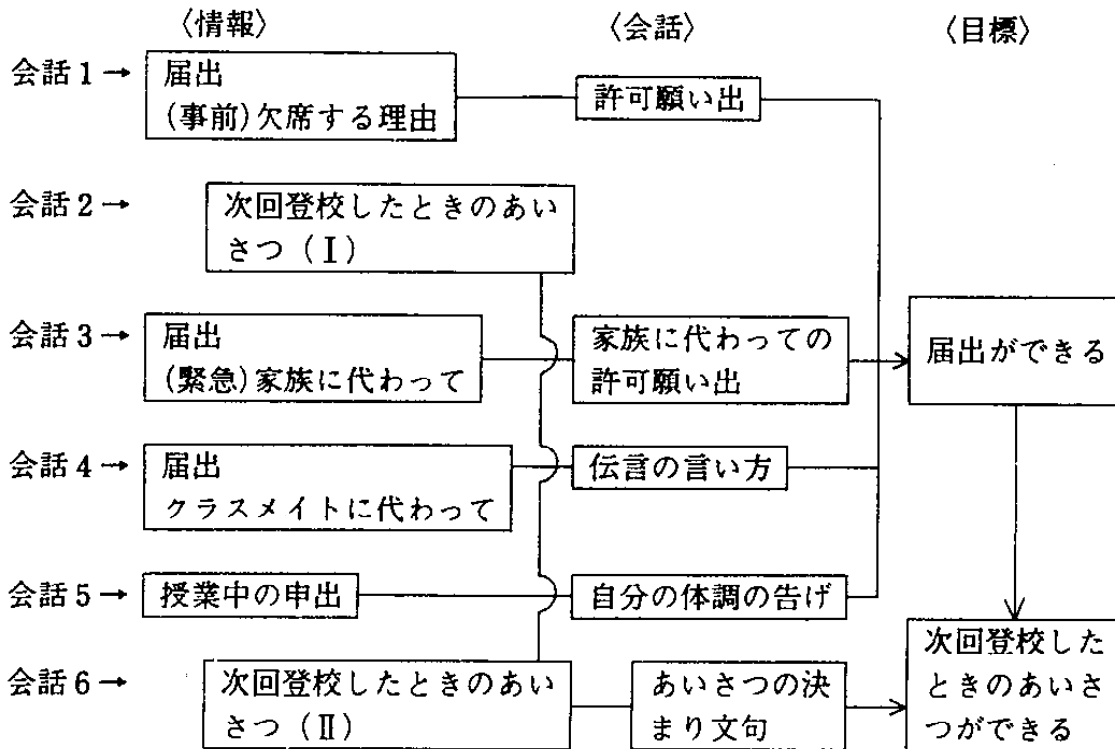
第1課 届出

● この課の目標と重点

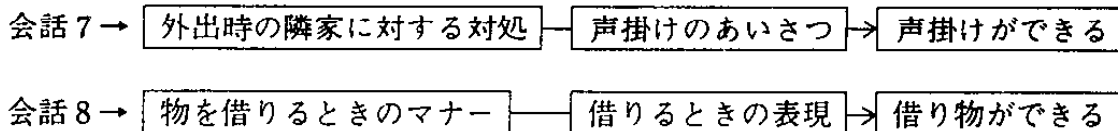
- ① 日本語教室などで遅刻・早退・欠席等をする場合の届出や、次回登校したときの「あいさつ」を日本社会の慣習として理解し、適切な方法でできるよう学習する。
- ② 日本社会における、外出時の隣近所への声のかけ方、人に物を借りるときの依頼の仕方を知り、日常生活で生かしていく力をつける。
- ③ ①について、職場での同様の場面や子供の学校に対する届出等に応用できるようにする。

● 課の構成と各会話の関連

〈欠席等の届出〉



〈隣人関係〉



[会話-1] あした、用事で欠席するのを届ける

<p>行動達成目標</p> <p>学校（日本語教室）などで自分の都合によって欠席等をする場合、事前の届出ができる行動能力をつける。</p>	
知識	<p>日本社会で欠席等が許可されうる理由・期間を各学校や職場等、場合に分けて理解し、併せて届出の方法を知る。</p>
表	<p>① 届出で「いつ、どうする」をはっきりと → (あした)(休み) たいんですが。願出の形で言えるようにする。「動詞(マス形) + たいんですが」の用法をマスターする。</p>
現	<p>② 届出で理由を伝える言い方を学ぶ。 → 実は(九州から弟が来る)んです。「実は、～んです」の用法をマスターする。</p>

● 指導の前に

① 日本社会での届出

届出について日本社会の「通念」といったものを、考えてみよう。

子供が学校を休む場合、親（保護者）は、子供の学校へ何らかの方法で届出をする。前もって分かっているなら早めに、病気等緊急の場合でも授業開始までにはする。方法も、正式には学校で決められた様式、例えば、生徒手帳の届出欄に記入し押印する等である。しかし、緊急の場合はとりあえず電話連絡や子供の友達に伝言を頼んだりすることが必要である。無断欠席は本人（本人が子供の場合は親）の社会性の欠如と見なされやすい。

また、これらの届出は、「願出」、それに対しての「許可」という形をとるのが普通である。これは日本人の価値観において学校や仕事をどう位置付けているかと関係している。

「許可を願出する」というからには、それにふさわしい言い方（許可求めの文型「～させていただけたいんですが」等）で、ふさわしい態度（申し訳ないという気持ちを込める等）で言わなければならない。

さらに、職場の場合は、仕事という共同作業に支障を生むことがどうしても避けられないので、そのことを気遣わなければならない。休暇の「願出」をしても、仕事の都

合上、即答されず、保留されたり別の日に変更されたりすることもある。また許可されないこともないとは言えない。

② 中国社会での欠席・欠勤についての通念

上述のような日本社会での通念は、諸外国の通念に照らして、必ずしも抵抗なく受け入れられるものではないようだ。中国社会の通念も知った上での指導が必要である。

現在の中国では(地域によっても差があるが)次のような面で日本の場合との違いが見られると言えよう。

まず、学校だが、小・中学校での欠席等は、それほど取りやすいとは言えないが、家事の都合等での欠席は認められる。しかし、大学等は、寄宿制が普通であり、日本の場合とは違い、欠席等は厳しく制限されている。ただし、家族の冠婚葬祭や看病、また、郷里が遠方の者に対する長期休暇を繰り上げての帰省等は優遇されることもある。

これに対し、職場では、多くの家庭が共稼ぎで、個人の都合を認め合う風潮があるようだ。ほとんどの機関、企業が国営であり、被雇用者には様々な権利もあり、職場間の格差や男女による扱いの違いも少ない。病気等での欠席などは本人の場合だけでなく、家族の看病等についても休暇の配慮がある。

また、仕事の都合で家族が離れ離れに住むことも多く、広い国なので年に一度ぐらいしか会えないこともある。このような部下に対して機会があれば休暇が取れるようにするのがいい上司ということになる。出張などでは、行き先に家族や親戚のある者を当て、仕事に必要な日数にプラス・アルファすることもある。

緊急の場合の欠席等の連絡についてだが、電話があまり普及していない現状から言っ、て、伝言でする場合が多いが、やむをえず事後報告のこともある。

いずれにしても、欠席等について日本ほど「すまない」という言葉を要求する社会ではない。この面では日本社会のそれとは大きく異なる。

③ 指導に対する配慮点

以上のような、両社会の状況に関連した職業や学校、欠席やその届出等に対する考え方の違いは、両社会の人々の価値観の違いとみなされる。

日本社会は、勤勉を至上のものとして、個人(自分)を全体に合わせていく面があり、病気などでやむをえない欠席をするときにも、「すみませんが、～」と謝って願い出ることになる。

このような価値観についてはどちらが正しいかの議論をしても始まらない。大切なのは、学習者がなるべく早く、かつ、抵抗なく日本社会での届出ができるようになる

ことだ（逆に、受け入れ側でも、それまで忍耐強く待つことも必要だ）。そのために、教授者の指導上の工夫が重要になる。

日本語教室等では、これらの学習と並行して、学習者が欠席等をする場合実際に届出を行うよう指導するとよいだろう。つまり、「届出ごっこ」から始めて、無理なく習慣化できるよう工夫したい。個人指導の場合も子供の学校や自分の職場への届出等、実際の例などをおりませで練習したい。

しかし、日本社会のルールに適した「届出」をすることは必要であっても、日本のルールを押し付けるような指導は拒否反応を生む等逆効果になるということに注意したい。異文化の価値観については「習うより慣れろ」という教授者側の柔軟さが大切だ。

● 準備

- ① 欠席等の届出用紙（各日本語教室で使用しているものがあればそれがよい）や届出欄のある児童・生徒手帳などを用意しておく。
- ② 【4】の①で用いる動詞の絵カード等を用意しておく。
- ③ 机の配置は、お互いに顔を見ながら話し合える形とする。

● 授業

【1】導入

① 学習場面を確認する

教科書P15の解説文の上4行を学習者に音読させる。

② 学習場面に関連した質問による動機付けをする

教授者から学習者に次のような質問をする。

例 ・中国の学校や職場では、欠席・遅刻・早退・忌引等をするときどういう手続きをするか。

・中国で長期の休暇はどんなときに何日ぐらい取れるか。

・日本では、欠席等をするとき、日本語教室や子供の学校、職場等にどのような届出をしているか。（また、そのときどう言うか・トラブル例）

③ 届出方法を提示する

話し合いの結果を踏まえて、教授者が日本の学校や職場で欠席等をする場合どうするかを実際に即して示す。届出用紙や生徒手帳等を見せながら行うとよい。学習者同士で中国の場合と比較したりして意見交換もしたい。

④ 現実場面において対応検討する

今後、この教室ではどうしたらよいか教授者も参加して意見を出し合う。

⑤ 学習目的を提示する

〔会話－1〕から〔会話－6〕の学習は日本社会での届出に関連した場面で、各会話場面の行動能力を付けることの意義を伝える。

*①～⑤は、学習者に対する〔会話－1〕の学習の動機付けでもあり、学習場面の「行動達成目標」を意識させるためのものでもある。学習を単なる言葉の指導にせず、場面での行動能力をつける指導にするためにも、是非、行いたい。また、これらについて、教授者が中国語を話すなら、適宜中国語を用いてもよいし、そうでない場合でも、学習者の中でよりレベルの上の者に通訳をさせたりしてもよいと思われる。以下、各会話についても同様なことが言える。

⑥ 届出場面の関連表現を確認する

これまでの話し合い等に出てきた届出の場面に関連した語彙・表現（そのつど板書しておく）について意味・発音等を確認しておく。

⑦ 会話場面の内容理解の確認をする

教科書は見ず、〔会話－1〕の会話部分のみをテープで聞かせ、内容把握を確かめる質問をする。

例 ・林さんは、明日、遅刻したいんですか、欠席したいんですか。

・それはどうしてですか。

・「先生」は、休んでいいと言いましたか、いけないと言いましたか。

⑧ 聞き取り理解を確認する

もう一度テープを聞いて答えが正しかったかどうか確認する。

【2】展開

① 話の切り出しの言い方を練習する

人にものを頼むとき、呼び掛けの形で話を切り出す言い方を二人のロールプレイで練習する。学習者から教授者、学習者同士の順で行う。

例 学生： あのう、先生（～さん）。

先生： はい。なんですか。

② 欠席の願い出の言い方と受けの練習をする

次のようなやり取りを①と同じ方法で行う。

例 学生： あした、休みたいんですが。

先生： ええ、いいですよ。

*レベル1の学習者には、「あした、休みます。いいですか」などの表現でもよいから、願い出にふさわしい態度で言えるようにする。

③ 理由の問答を練習する

願い出の理由を説明する「実は、～んです」の表現練習を対話の形で行う。これも教授者と学習者、学習者同士の順で行う。

例 先生： (でも) どうしてですか。

学生： 実は、九州から姉が来るんです。

先生： ああ、そうですか。

*必要なら始めは例のような対話の文(型)を板書などして示してもよいが、練習が進むにつれて、少しずつ消していき、最終的に何も見ずに言えるようにしたい。

*レベル1の学習者には、「弟、来ます。弟、九州です(九州にいます)」でも内容は伝えられるので、何らかの方法で届出をすることが大切だとの意識を持たせることを重点にしたい。

④ 会話場面のロールプレイをする

〔会話-1〕のテープを通して聞いて、学習者二人一組でロールプレイをする。態度も含め各学習者の日本語力に応じた「届出らしさ」も要求する。

【3】応用

① 理由を替えた届出の練習をする

学習者に〔会話-1〕に類した欠席等の理由を幾通りか口頭で示し、内容理解の確認をする。次に要旨を板書し、それぞれに適した欠席の届出をする。

例 (口頭で) 林さんは、お金がなくなったんで、明日銀行へお金を下ろしに行きたいと思っています。10時に銀行に行くんで、教室には1時間ぐらい「遅刻」しそうです。それで、先生に遅刻してもいいか尋ねます。

(質問) ・林さんは、休みたいんですか、遅れて来たいんですか。

・それはどうしてですか。

・どのくらい遅刻しますか。

(板書) 朝、ちょっと遅刻したい。

あした銀行へ行って、お金を下ろしたい。

11時ごろ教室に来る。(1時間ぐらい遅刻する。)

*学習者が届出をし、教授者はそれにこたえる。通じることを第一に、学習者がおかしい表現をした場合は、届出が終わってから指摘する。ただし、態度等についても必要に応じアドバイスする。

*レベル1の学習者には、内容の聞き取りを重点として、届出については「いつ」「どうしたい」「どうして」を何とか伝えられればよいとする。

② 願い出の内容を替えた言い方の練習をする

願い出の言い方「(あした)(休み)たいんですが」と受けの「ええ、いいですよ」を次のようなキューを提示して練習する。

例 あさって	休む／欠席する
今度の土曜日	遅れて来る／遅刻する
来週の月曜日	早く帰る／早退する
25日の日	

*必要なら初めに使用する動詞のマス形に「たい」を付ける練習をする。上の例のように動詞の辞書形を示し、学習者が「～たい」の形で言う練習をする。

*レベル1の学習者には、「あした 休みます。いいですか」などの表現でもよいし、クラスメイトに要点を書いてもらった紙切れを示し、「いいですか」とだけ言ってもよいとする。ただし、願い出にふさわしい態度で言えるようにする。

③ 理由の言い方(訪ねて来る人を替えて)の練習をする

会話番号2～4に沿って欠席等をしたい理由、「実は(どこ)から(だれ)が来るんです」の対話練習を行う。「どこ」と「だれ」については、学習者になじみの深いものをキューとして用いる。

例 先生： (でも) どうしてですか。

学生： 実は、(北海道) から (姉) が来るんです。

先生： ああ、そうですか。

*地名、親族名称(教科書P27で復習する)等が不完全な場合は別に時間を取って練習する。

④ 理由を替えた届出のロールプレイをする

練習4-1(教科書P23～P24)に沿って、欠席・遅刻・早退等の許可の願い出の場面練習をする。必要ならば[会話-1]のテープをもう一度聞いてから練習に入ってもよい。

【4】発展

*この練習は〔会話―1〕の場面練習（あした、用事で欠席するのを届ける）とは切り離して行う。

① 希望を表す「動詞のマス形+たい」を作る練習をする

練習2-1（教科書P20～P21）に沿って「動詞のマス形+たい」を作る練習をする。この練習は、五段、一段、例外の各動詞の辞書形をマス形にして「たい」を付ける練習なので、学習者にとってそんなに難しいものではないだろう。ただ、動詞の意味を理解せずにただ機械的な変形練習をしても定着しにくく応用力がつきにくいので、注意したい。

次のような教室作業の方法が考えられる。

例 教授者は各動詞の絵カードを用意する。

学習者を二人立たせる。

教授者は絵カードの一枚を示して、学習者のうち一人がその絵にふさわしい動詞の辞書形を言い、続いて、もう一人の学習者がその動詞に「たい」を付けた形で言う。

しばらくこの練習をした後、教授者の役割も学習者に任せる。

② 許可求めの「動詞のマス形+たいんですが」の練習をする

練習2-2（教科書P21～P22）に沿って許可求め（依頼）の「動詞のマス形+たいんですが」の言い方を練習する。①で用いた動詞も必要に応じて加えるようにする。

このうち、学習者にとって重要なもの（覚えたらその表現がすぐ使えるもの）は、学習者に分かりやすい形で場面練習をするとよい。

例 使用動詞「電話する」

- 赤電話の模型を用意するか、黒板に赤電話の絵をかくなどする。
- 学習者の一人に10円玉を5個持たせる。
- 教授者は50円玉を手にとって、電話をかけたいんだが困ったというジェスチャーをしながら、学習者全体に「何と言ったらいいでしょう」と尋ねる。学習者が答えを言おうとしたら制止し、分かった学習者には挙手させる。
- 挙手をした学習者の一人を指名して、10円玉を渡した学習者と一緒に前に出し、やり取りさせる。

学生A： すみません。電話したいんですが、10円玉ありますか。

学生B： はい、ありますよ。50円ですね。

学生A： ええ。すみません。お願いします。

学生B： はい。（硬貨を交換）

学生A： どうもありがとうございます。

学生B： いいえ。

* 「電話したいんですが」以外は学習者のレベルに合わせて（レベルⅠの学習者なら「でんわ」と言ったり、赤電話を指させればよい）自由に言えばよい。

* 「10円玉ありますか」のところは、レベルⅢの学習者なら「くずしていただけませんか」などが適当だろう。

③ 説明の「名詞（ナ形容詞）＋なんです」「動詞の辞書形＋なんです」の言い方の練習
練習3-1、3-2（教科書P22～P23）に沿って練習する。

* 変形の練習は難しくないと思うが、どんなときにこの説明文型を使うかを把握しないと、いつでも「～んです」を付けて言う妙な癖がつきかねない。使い分けができるようになるために、対話の形で提示したり練習したりすべきだ。

* レベルⅢの学習者等でかなり日本語学習をしてきた者が「～んです」と言う癖がついている場合がある。例を示して、まず、違いを意識させるところから始めて、直していきたい。次の例の「好きです」は「～んです」の形にするとおかしな表現となる。

例 A： Bさん、日本の歌は好きですか。

B： ええ。好きですけど……？

A： 明日の晩、「○○□□ショー」に行きませんか。

B： はあ？

A： 招待券があるんですけど、私、行けないんですよ。

④ 理由の説明の「実は～んです」の言い方の練習をする

練習3-3（教科書P23）に沿って、理由の説明（相手に申し出たり、告げたりしたことについて、どうしてそう言ったかを後から述べる場合）を「実は～んです」で言う言い方を練習する。ただし、「子供がたいへんです」は緊急の助けを求めるときなどしか言えないことを理解させるよう、適切な場面を提示したい。

* レベルⅢの学習者は、ここまでの練習に加えて〔会話-1〕の「先生」の分の発話も学習したい。特に、付加的に理由を問う「でも、どうしてですか」や、相手の立場で言う「それは、楽しみです」などの表現は用途が広い。

【動詞の復習 1】 教科書P18～P20

* この項は〔会話-1〕の学習とは別に行う。学習者のレベルに合わせて提示の仕方を変えたり、例文・練習問題の量、レベルを変えて指導できるよう、事前の準備段階から幾通りかに分けて考えておく。

教科書には動詞を三種類に分けてそれぞれの活用形を示してある。これらは『生活日本語』で既に学習済みの内容を復習として確認するものである。もちろん学習者によってはその必要のない場合もあるだろう。逆に「活用」を無理に理解させようとする方が悪い場合もある。レベル1の学習者にとっては、活用形を文の中に現れた形でその都度覚えたり、「食べない」を自分が言うときは「食べるない」でもいいから、言うことが大切だろう。教授者が、学習者の「食べるない」と言ったのを聞いて、活用の体系を指導するか、「それは『食べない』ですよ」と言い直すだけ（気長に続ける）にするかは、学習者に合わせて行いたい。

一般的に復習として扱う場合の例を次に示す（付録 動詞の活用P197～P207参照）。

① 動詞の活用表（事前の宿題）を作る

事前に宿題として教科書P18～P20の「動詞の復習」の部分を読んで、三種の動詞を各数個、活用表の形にしてくることとする。その際、表の形式・記入例などを示す。動詞は教科書のものでもよいし、学習者に合わせたものでもよい。

例 活用表書き込み用紙

動 詞	活 用 形						
	ナイ形	マス形	テ 形	辞書形	バ 形	ウ/ヨウ形	命令形
例 書く(五)	かかない	かき	かいて	かく	かけば	かこう	かけ

② 動詞の活用表の作成テストをする

授業の始めに、空欄の活用表を配り、表完成のテストをする。テスト回収後、学習者同士で確認し合う。教授者は必要に応じて例文等により用法を示す。

宿題を回収し、添削する。

③ 動詞の活用について習得度を把握する

テストや宿題から学習者全体の問題と個々の問題を把握し整理しておく。

全体の問題については次回の授業で対処し（再テスト等をしてよい）、個々のものについては個別指導をする。長期間に対処すべきものは個人カルテ等に記入しておく。

〔会話－2〕 欠席した次の日のあいさつ

<p>行動達成目標</p> <p>学校や職場を欠席等して、次回登校したときのあいさつ（報告）が適切な形でできる行動能力をつける。</p>	
知識	<p>欠席などをして次回登校したときのあいさつの方法を理解し、併せて、日本社会で慣習化している「先日はどうも（失礼しました）」等前回の出来事について、わび、礼、共通理解の確認等をするあいさつ表現を知る。</p>
表現	<p>右のような「（時）は（どうも）（内容）→（昨日）は（どうも）（失礼し）ました」の場合に応じて応用できる力をつける練習をする。</p>

● 指導の前に

「先日はどうも……」「日曜は失礼しました」等、前回相手と共有したことを話題にしたあいさつは、日本社会では、ごく一般的なあいさつ表現として使われる。

ところが、この表現が日本以外の多くの社会の発想からすると、奇妙な表現ということになる。つまり、もらったときに礼を言った（迷惑をかけたとき謝った）のに、次に会ったときにも礼（わび）を言わなければならないというのでは、恩に着せられている（いつまでも罪を感じさせられている）ようだということである。

帰国者や外国人にとっては、これらの表現が日本では必要なマナーなのだと理解した後でも、つい、うっかりして言い忘れたり、相手から言われて何のことかと、とまどうことが多いそうだ。西洋人などで「この種のあいさつをする人はお世辞上手な人と感じられるし、言われて何とも思わない人はごう慢な人に思える。この種のあいさつをするのはどうしても嫌だ」という人もいるという。

指導に当たってこれらのことも考慮しなければならない。

● 準備

- ① 学習者は「先日はどうも（失礼しました）」の表現（「失礼しました」を「お世話さまでした」「ありがとうございました」等に変えた表現も含む）について日常よく耳にするものをそれはどんなときに言うのかも含めて書き出してくる。
- ② 教室の前は場面練習ができるように空けておき、机と椅子を一組置く。

● 授業

【1】導入

① 実際の状況の発表による動機付けをする

学習者に日本語教室や職場で欠席等をして、次に登校（出勤）したとき実際にどのように「あいさつ」しているか等を問い、これについて話し合う。

② 会話場面の聞き取り理解の練習をする

「林さんは、休んだ次の日、日本語教室に登校してすぐ事務室へ行って、先生に次のように報告しました」などと言って〔会話－2〕のテープを聞く。

【2】展開

① 「昨日はどうも失礼しました」の発話練習をする

「昨日はどうも失礼しました」の発話を滑らかに口をついて言えるようにリピート練習をする。次の順ですると発話しやすいと思われる。

失礼しました → どうも、失礼しました → 昨日は、どうも、失礼しました

② 学生「きのうはどうも失礼しました」、先生「いいえ」のロールプレイをする

滑らかに言えるようになったら、受けの「いいえ」も加えて、「学生」と「先生」の会話を（頭を下げる等の身振りにも注意して）ロールプレイする。

最後に学習者の一人と教授者がロールプレイし、学習者の「昨日はどうも失礼しました」に続けて、教授者が「いいえ。で、どうでした」と言うことで学習者から「ええ。本当に楽しかったです」の発話を引き出す。

③ 会話番号1～3のロールプレイする

④ 会話場面の場面練習をする

〔会話－2〕のテープを通して聞いて、学習者二人一組で場面練習をする。この際、「学生」になった者はドアの外に出て、ノックから入室のあいさつ等も含め、ドアの外に出るまで演じる。

【3】応用

① 欠席等の内容を替えた言い方の練習をする

学習者は〔会話－1〕の練習4－1（教科書P23～P24）の各理由で欠席・早退したという前提で、〔会話－2〕のどこをどう直したらよいか発表する。クラスでそれを検討して、教授者は適切な表現を示す。

例 (理由) 子供が熱を出したので昨日は休んで医者連れて行った。

学生： 昨日は、どうも失礼しました。

先生： いいえ。で、お子さん、どうですか。

学生： ええ、おかげさまで、(もうすっかり)よくなりました。

先生： そうですか。それはよかったですね。

*レベルⅢの学習者は、会話文の「先生」の発話も練習する。相手の話を受けて更に状況等の説明を促す「で、どうでした」、相手の説明した状況に相手の立場になって言う「そうですか。それはよかったですね(たいへんでしたね)」なども練習し、適切に使用できるようにしたい。

② 欠席・早退の理由を替えての翌日登校したときの報告の場面練習をする

各学習者に欠席・早退等の理由を示し、その理由で欠席・早退したという前提で、翌日登校したときの報告を場面練習とする。

*他の教授者などの協力が得られれば、事務室等で実習として行うとよい。

【4】発展

① 「先日はどうも……」等のあいさつ表現の意味・用法の確認をする

「先日はどうも……」等のあいさつ表現を集めてくる宿題(P21準備①)を発表し合う。必要なら教授者はこれらの表現の意味・用法を簡単に説明する。

*この目的は、学習者に、これら「日本的な表現」に対し日常の生活を通じて注意を向けさせるようにすることである。

② 「先日はどうも……」「いいえ、こちらこそ」等のやり取り練習をする

[会話-2]のための練習(教科書P25)で、「(時)は、どうも、失礼しました」「いいえ。(こちらこそ……)」のやり取りを練習する。その際、教授者はそれぞれのやり取りについて「失礼した」とお互いに言い合う前提になった理由を提示する必要がある。

例 数日前、林さんは森さんに相談したいことがあってA駅で待ち合わせをした。森さんは、時間に15分程遅れてしまった。

次回、森さんが林さんに電話をした。

〔会話－3〕 家族の者の欠席を届ける

<p>行動達成目標</p> <p>家族の者が日本語教室等を緊急に欠席等をする場合、本人に代わって届出ができる行動能力を付ける。あわせて、子供や弟妹が学校に緊急に欠席等する場合保護者(保護者の代理)として連絡、届出ができるよう応用力をつける。</p>	
知識	<p>家族が病気などで欠席する場合、家族に代わって届出する手段・方法を知る。</p>
発 現	<p>① 欠席等の許可を求める丁寧な言い方 → 休ませていただきたい。 を学ぶ。 「動詞+(さ)せる」の使役の形に「いた ただきたい」を付けた形、またさらに 「んですが」を加えた形とその適切な → 休ませていただきたいんですが。 用法をマスターする。</p>
	<p>② 症状・病状を本人に代わって述べ欠 → (頭が痛い)と 言って……。 席をしたい理由を伝える言い方を学ぶ。 伝文の「～と言う」の表現を練習し、 併せて「～と言って」で止めて言う省 略表現の用法を学ぶ。</p>
	<p>③ 本人に代わって許可を求める言い方 → (家内)が(今日)休ませていただき を学ぶ。 たい と言っているんですが。</p>

● 指導の前に

ここでは日本社会で欠席等をするときの、一般的届出の形である「許可の願い出」の言い方、「～させていただきたいんですが」等を導入している。このような使役形による依頼表現は日本社会ではフォーマルなものとして多用される。これは、先生や上司の許可があって始めて、願い出たことが実現されるものと考えからである。しかし、これらの表現はどの帰国者も使わなければならないものではない。レベルⅠの学習者はもちろん、レベルⅡの学習者に対しても、可能な者だけに指導したい。

また、意義についても「～たいんですが」の表現の「より丁寧な言い方」としておけばよいだろう。

● 準備

- ① 学習者は練習1-1（教科書P27）の親族名称の言い方を覚える。
- ② 教授者は練習3-1、練習4-1（いずれも教科書P32）、練習5-1（教科書P33）で用いている、親族、時、症状について、それぞれいくつかをカードにしておく（絵カードでもよい）。
- ③ 教室の前は場面練習ができるように空けておき、机と椅子を一組置く。

● 授業

【1】導入

- ① 親族の呼び方（自分側と相手側の違い）の確認をする

練習1-1（教科書P27）に沿って親族の呼び方を、自分側・他人側と対照させて言えるかどうか、テスト等で確認する。

混同する学習者が多い場合は、この対照表（の一部）を板書し、「私」または、「先生」の家族の呼称のどちらか一方を消して、消えている部分を即答する練習をする。次に、自分側を「私の」以外に「家内の」・「主人の」等も加え、他人側を「先生の」以外に「奥さんの」・「林さんの」等も加え練習した後、対話練習等の応用練習をする。

例 森： 林さん、奥さんのお兄さんはおいくつですか。

林： 家内の兄は、46歳です。

森さんのご主人はおいくつですか。

森： 主人は、48歳です。

- ② 「休ませていただきたいと言っているんですが」の発話練習をする

滑らかに言えるまでリピート練習をする。次のように段階を踏んで練習をするとよい。

例 いっているんですが→いただきたい→やすませていただきたい→やすませていただきたいといっているんですが

*多くの学習者にとって発音しにくいと思われるので、この練習だけ長く続けるのは、学習意欲を損いかねない。学習者によっては、別に時間を取って練習させるとよい。

- ② 会話場面の聞き取り理解の練習をする

〔会話-3〕の会話部分のテープを聞かせ、内容把握を確かめる質問をする。

【2】展開

① 話しの切り出しの言い方の練習をする

会話番号1・2のやり取りが滑らかにできるかどうか、学習者同士でロールプレイする。〔会話-1〕の【2】①(P15)の復習として簡単に行う。

② 「今日、休ませていただきたいんですが」の発話練習をする

「休みたい」と「休ませていただきたい」を板書し、教授者がどちらか一方を指し、学習者はそれに「今日」と「んですが」を付け加えて発話する練習をする。

③ 「(家内)が休ませていただきたい(休みたい)と言っているんですが」の発話練習をする

この表現を奥さんに代わって届出する言い方として提示する。学習者に応じて「家内」の部分を「主人」「母」「父」「姉」「兄」等に替えて言う練習をする。

④ 欠席理由の説明のやり取りのロールプレイをする

会話番号4・5・6を教授者と学習者、学習者同士でロールプレイする。

*会話番号5の文末の省略については触れる必要はないが、学習者から質問が出た場合は、レベルⅡの学習者であれば教科書P32の4の解説を示したり、レベルⅢの学習者であれば、「具体的にどうしている(寝ている・苦しんでいる・医者へ行った等)の部分を省略したものだ」と説明してもよいだろう。

⑤ 会話場面のロールプレイをする

〔会話-3〕のテープを通して聞いて学習者同士でロールプレイする。このとき次のような方法も考えられる。

例 林さんと先生の発話を黒板の左右に分けて書く。

[林]	[先生]
1 あのう、先生。	
	2 あ、 <u>林さん</u> 、何ですか。
3 <u>家内</u> が、今日、休ませていただきたいと言っているんですが。	
	4 あ、 <u>奥さん</u> が、どうしたんです？
5 はい、昨日の夜から頭が痛いと言って……。	
	6 ああ、そうですか。 分かりました。 お大事に。

これを見ながら二人一組でロールプレイする。一組が終わるたびに会話の一部を消していく。最後には会話番号だけを残して全部消してしまう。

* 「休ませていただきたいと言っているんですが」の表現は、レベルⅠの学習者は「家内、今日、休みます。いいですか」と言ってもよい。レベルⅡの学習者もこの時点では「家内が今日休みたいと言っているんですが」などでもよいとする。

【3】応用

① 家族に代わっての届出の言い方の文型練習をする

練習3-1（教科書P32）に沿って、家族に代わって届出をする言い方を練習する。親族名称と時を書いたそれぞれのカードの任意の一組を示し、これを見て学生が「（だれ）が（いつ）休ませていただきたいと言っているんですが」の文を作るという方法がよいだろう。

* 「娘」「息子」とあるが、これらは学齢期を過ぎた子供と考えたい。小・中学生の場合、保護者が学校に届出するときは、「（実は、娘が昨夜から熱を出してしまいまして、すみませんが）今日休ませたいと思うんですが」等、保護者の意思で願出する形をとるのが普通だろう。レベルⅢの学習者はこのような表現形も練習し、使えるようにしたい。

② 欠席する家族の病状を説明する言い方の練習をする

練習4-1（教科書P32）に沿って練習する。時（症状が始まった時点）・身体部位（症状が起こっている部位）を書いたカードを用い、語彙を確認した後、教授者が学習者に任意のカード2枚（一組）を渡し、「奥さん（ご主人）、どうしたんですか」等の問い掛けをし、学習者はカードの内容で説明する。しばらく練習した後、学習者同士でもやり取りする。

③ 欠席する家族に代わっての届出のロールプレイをする

練習5-1（教科書P33）に沿って学習者二人（A、B）で場面練習をする。これも親族名称・時・症状をそれぞれカードにし、A：「学生」の役に当たった学習者は任意の3枚（一組）を教授者から受け取り、その内容で、B：「先生」の役に当たった学習者に対して届出する。

* このようなスキットは、教科書の字句通りに言わなければならないというものではない。届出をする行動能力がつけばよいのだから、学習者のレベルに合った表現で言えるよう指導したい。また、スキット中には学習者がよほど行き詰まらない限り教授者等が途中で口をはさまない方がよい。学習者が自分なりの言語行動で切り抜ける工夫をする習慣をつけたい。言い間違

いなどはスキットの後で指摘したい。

④ 家族に代わっての欠席等の届出を実習する

事務室で行ったり電話を使用したり届出用紙に記入したり、学習者に合わせ実際に近い形で行う。

*「子供の学校へ電話で届ける」等も行いたい。これには、「担任の先生を呼んでもらう」「自分の名乗り」等も含まれるので、あらかじめ練習の時間を十分に取りたい。

【動詞の復習 2】 教科書P27～P31

*この項は〔会話－3〕の学習とは別に行う。ここでは、動詞に助動詞の「せる・させる」をつなぐことでいわゆる使役表現を作る復習から始め、自分側の希望を述べ許可を請う（自分側の意思・意向・希望を伝えて、相手の許可を求める）表現「動詞＋（さ）せてください」・「動詞＋（さ）せていただきたい（と言っているんですが）」までを練習するものだが、これも学習者のレベルに応じた指導を工夫しなければならない。

① 使役の形「動詞＋（さ）せる」とこの形を用いた許可求め等の練習をする

指導方法については、練習2－1（教科書P27）から練習2－9（教科書P31）まで順に進めていけばよいが、単なる変形の練習にしてしまうと、用法が定着しにくい。できる限り、対話のやり取りの形でも提示したい。

ア 練習2－1から練習2－3（教科書P27～29）に沿って、「動詞＋（さ）せる」が使役の形であることを確認し、動詞の活用の型別に「（さ）せる」の接続練習をする。その後、場面を提示する。

例 教授者が学習者（A）に対し、黒板に「欠席」と書くように指示する。学習者が書いた後、教授者は他の学習者に対し質問する。

先生： Aさんは何をしましたか。

学生： 「欠席」と書きました。

先生： 先生（わたし）は、Aさんに（何をしましたか）？

学生： Aさんに、「欠席」と書かせました。

（Aさんに、「欠席」と書いてくださいと言いました。）

*学習者が教授者に「書く」ことを依頼した場合は、普通「（Aさんは）先生に「欠席」と書いてもらいました」等と言う。

一般に、「～（さ）せる」側（使役文の主語）は、「～する」側（使役文の行為・行動主）より目上のことが多い。学習者がこれらを混同している場合は、個人指導をしたい。

イ 練習2-4から練習2-9（教科書P29～31）は、許可求めの言い方の練習だが、初めに次のような場면을提示してこのような表現の意義・用法を確認しておきたい。

例 教授者はヘッドホン・ステレオを聞きながら楽しそうな顔つきをする。学習者が、何を聞いているのかと質問してきたら、「中国の音楽だ」等と答え、スイッチを切ってヘッドホンを外し机の上に置く。学習者が、「聞かせてください」等と言ったら、学習者の一人（B）に聞かせる。教授者は他の学習者とBに質問する。

先生： （他の学習者に）Bさんは、何をしましたか。

学生： Bさんは、中国の歌を聞きました。

先生： そうですね。（わたしは、）Bさんに聞かせてあげましたね。（Bに）そうですね。

B： はい。聞きました。（そうです）

このBの発話を「聞かせてもらいました」と言い換えられることを示す。重ねて、「先生」とBとの発話を対にして板書する。

先生： わたしは、Bさんに、中国の歌を 聞かせてあげました。

B： わたしは、先生に、中国の歌を 聞かせてもらいました。

他の学生は、先生とBの「わたしは」の部分を「先生は」・「Bさんは」と替えて言う。

*この練習はやりもらい表現を学ぶものではなく、許可を与える側・許可を受ける側の関係を押さえながら、学習者が許可を求める表現の形を練習できるようにする導入である。学習者が関係をつかまえたと思われた段階で形の練習をしたり、学習者に混乱が出たらまた場면을提示したりするのを繰り返すとよい。

ウ 練習2-4から練習2-9（教科書P29～31）の形の練習を適宜、やりやすい順番で練習する。ただし、学習者の意義の把握が不十分であると感じられた場合は、上で触れたように、適宜、場面を示したり、対話の形にしたりして示すべく準備をしておく。

〔会話-4〕友人の欠席を届ける

行動達成目標

日本語教室等で、欠席・遅刻等をするクラスメイトに代わって伝言を伝える行動能

	力をつける。
知識	やむをえず、急に日本語学校等を欠席・遅刻する場合、クラスメイトに伝言を依頼する。また、依頼されたときの報告の仕方を知る。
表現	伝言として第三者の状況を説明する言 → (高橋さんは 休む) そうです。 い方を習得する。 (風邪で熱がある) んだそうです。

● 指導の前に

学校や職場に定時に登校・出勤できないときは、何とかして連絡すべきである。電話等で直接連絡しにくい場合、クラスメイトや同僚に伝言を頼むのが便利であろうと思われる。この際、過度な心配をさせないように理由をはっきり伝えることも大切となる。

また、伝言を頼まれた側も、先生や上司に責任をもって連絡しなければならない。できれば始業前に伝えたいところである。

日本語教室では、これら「連絡」の習慣がつくよう、事前に学習者に届出用紙を渡し、記入の仕方を練習しておきたい。欠席等をする場合、この用紙に記入してクラスメイトに託してもよいだろう。

● 準備

- ① [会話-3] の欠席等の理由の(中国語を併記した)カードを用意しておく。
- ② 机の配置は普通授業時と同じ。

● 授業

【1】導入1

① 学習場面をまず体験することでの動機付けをする

学習者二人を指名する。一人は「先生」役となり、教卓のところに立って後ろを向く(他の学習者に背を向ける)。他の一人は教室の端に座り、欠席や遅刻をした者となる。教授者は、この学習者に、欠席や遅刻の理由を書いたカードを渡し、学習者は「先生」役の学習者以外にそのカードを見せる(この時点で、この学習者は外に出てよい)。

次に、「先生」役の学習者が前を向いて、任意の学習者に、空席の「学生」がどうしたのかを問う。問われた学習者は自分のできる表現で答える。学習者に方法が分かりにくそうだったら、始めは教授者が質問する役になる。

② 会話場面を聞いて、①の確認をする

〔会話－4〕のテープを二回聞く。

【2】導入2

① 伝聞の形の文の聞き取り練習をする

教授者が言った内容が聞き取れるように練習する。

例 教授者は、「高橋さんは、お子さんが病気になったんで、休むそうです」等と言い、学習者がその内容を中国語訳したり、あるいは、あらかじめ渡された中国語のカードの中から選んだりする。

欠席の理由、あるいは「休む」の部分を「欠席する」「遅刻する」「遅れて来る」等と替えたりして練習する。

*これは、「んで」の前が欠席等の理由で、「そうです」が聞き伝えの言い方であることが理解でき、「お子さん」「病気」「休む」等の語が重要であることに気付かせるための練習である。

② 会話場面の内容理解の確認をする

〔会話－4〕のテープを聞いて内容把握の確認のための質問をする。

- 例
- ・だれが休みますが。
 - ・高橋さんが休むといったのはだれですか。
 - ・高橋さんはおなかが痛いんですか、風邪をひいたんですか。
 - ・熱は高いですか。何度あるんですか。

【3】展開

① 会話場面を通して発話練習をする

〔会話－4〕の会話部分のテープを区切りながら聞いて、学習者は二組に分かれて、ロールプレイ風にまねる。

② 会話場面のロールプレイをする

次に、学習者二人でロールプレイする。

③ 応用の場面練習をする

【1】導入1①(P30)で各学習者が行った伝言を、上で学習した事項を使ってもう一度繰り返す。教授者は「先生」役で、学習者に応じて質問を一部変えてもよい。

【4】発展

① 学習内容（伝聞表現）の確認をする

学習者は説明1（教科書P34）の中国語の説明を読む。

② 伝聞「～そうです」の表現の練習をする

練習1-1から練習1-3（教科書P35～36）に沿って伝言の言い方をパターン練習する。ここでも形の練習だけにならないように工夫したい。

例 黒板に「帰ります」・「帰りません」、「買います」・「買いません」等を書いておく。三人の学習者（A、B、C）を指名し、三人のやり取りで対話練習する。A、Bは一緒に、Cは離れて立つ（衝立等で隔てていれればなおよい）。

A： Bさん、Cさんは帰りますか、帰りませんか。

B： ちょっと待ってください。

（BはCに聞く）帰りますか、帰りませんか。

C： 帰りません。

B： （Aに向かって）Cさんは、帰らないそうです。

A： ああ、そうですか。

さらに対話の形で場面を示して、定着させたい。

例 クラスの仲間が放課後残って自習することになった。林さんが見えません。

学生A： あれっ？ 林さんは？

学生B： ああ、奥さんが、風邪をひいたんで、先に帰るそうです。

学生A： そうですか、それはいけませんねえ。

*このような対話場面や、教科書の会話の「応用会話」等は、あらかじめ、教授者側でスキットの形で録音しておくとうよい。できれば場面説明の部分は中国語を話す教授者等に中国語で入れてもらうとうよいだろう。

〔会話－5〕早退の許可を求める

行動達成目標

日本語教室等で、授業中に体調が悪くなって早退をしなければならなくなったとき、教授者に申し出て許可を得る行動能力をつける。

知識

学校等で急に早退や外出しなければならないときこれらの許可を願い出る言い方・態度や心掛けるべきこと等を知る。

表	① 体の具合が悪いとき等、「ちょっと～ん → ちょっと (気分が悪い) んですが。ですが」を用いて、自分の状況を告げ、許可求めを切り出す言い方を学ぶ。
現	② 自分のしたいことについて許可を願い出 → (うちに 帰っ)てもいいですか。る言い方を学ぶ。
	③ 「一人 <u>で</u> 」・「みんな <u>で</u> 」等の「 <u>で</u> 」の → 一人 <u>で</u> 大丈夫ですか。用法を学ぶ。

● 指導の前に

帰国者にとって授業中のマナーを身につけるのも難しい。学習者の中には、あまりこだわりなく鉛筆を削りに立ったりする者もいる反面、具合が悪くてもかなりひどくなるまで我慢をして休み時間などにこっそり帰宅するといった者もいる。

授業中に早退等をしなければならないときは、容体をありのままにはっきり告げることが大切である。しかし、一般的に日本では、相手に過度な心配をかけないような言い方をする。それでいながら聞く方はその真意をくまなくてはならない。「たいしたことありません」に対して「いえ、無理しないでください」と答えるのもこの例である。このような習慣にも慣れてもらいたい。

● 準備

- ① 基本的な動詞（五段・一段・例外の各動詞を含み、かつ五段動詞についてはすべての行を漏らさないようにする）について、辞書形又は、「～ます」の形を示し、それぞれを「～てください」の形に変える宿題を出しておく。表に記入させるとよい。（教科書 P40、P43、P44の動詞の活用表を参照）
- ② 早退の理由（緊急性のあるもの：頭が痛い、熱がある、おなかが痛い等）を書いたカードや絵カードを用意しておく。

● 授業

【1】導入

- ① この会話の中心文型「～てもいいですか」の導入・練習をする
準備①で出した宿題について、三種の動詞（五段・一段・例外動詞）を「～て」の形

に変換する仕方の理解度を確認する。

*これは、あくまで会話場面の練習のための導入として行い、動詞の活用体系を学ぶ手段としての練習は別に時間を取って行う。

ア 宿題は動詞を「～てください」の形に変換してくるものだったので、次のような練習を行い、「て」の前の部分は同じ仮名であることを確認する。

例 書く→ 書いてください→ 書いてもいいですか→ 書いています
買う→ 買ってください→ 買ってもいいですか→ 買っています
休む→ 休んてください→ 休んでもいいですか→ 休んでいます

イ これらの動詞のうち幾つかを、辞書形やマス形から「～てもいいですか」の形に変える練習をする。簡単に場面を提示するとよい。

例 (おなかが痛いんですが)	(頭が痛いんですが)
帰る→ (帰っ) てもいいですか (保健室へ)	早退する→ (早退し) てもいいですか (薬を)
行く→ (行っ) てもいいですか	飲む → (飲ん) てもいいですか

ウ イの板書を見ながら、教授者が「おなかが痛い、保健室へ」等、理由の部分を提示し、学習者がそれに対応する「行ってもいいですか」等を言う。

② 学習場面の理解と症状・病名を問うことでの動機付けをする

〔会話－5〕の会話部分をテープで聞いて、どんな場面か、林さんはどうしたのだろうか等を話し合う。「気分が悪い」という表現から、症状（おなかが痛い・めまいがする・吐き気がする等）や病名（風邪・乗り物酔い・寝冷え等）で学習者が知っているものを挙げ、意味の確認、発音の練習等をする。

【2】展開

① 会話場面のロールプレイをする

〔会話－5〕のテープを、場面の説明の部分も含め、一度通して聞いた後、会話番号1～4、5～7、8～9の順に区切って、もう一度聞きながら教授者と学習者で、「先生」と林さんの部分をロールプレイする。この際、文単位の発音やイントネーションの指導もする。次に学習者同士でロールプレイする。

*この練習中に、語句の意味について学習者の理解が不十分と思われたら、簡単に説明する。この時点ではあまり細かい説明は避け、文単位でどういう意義があるか理解できればよい。む

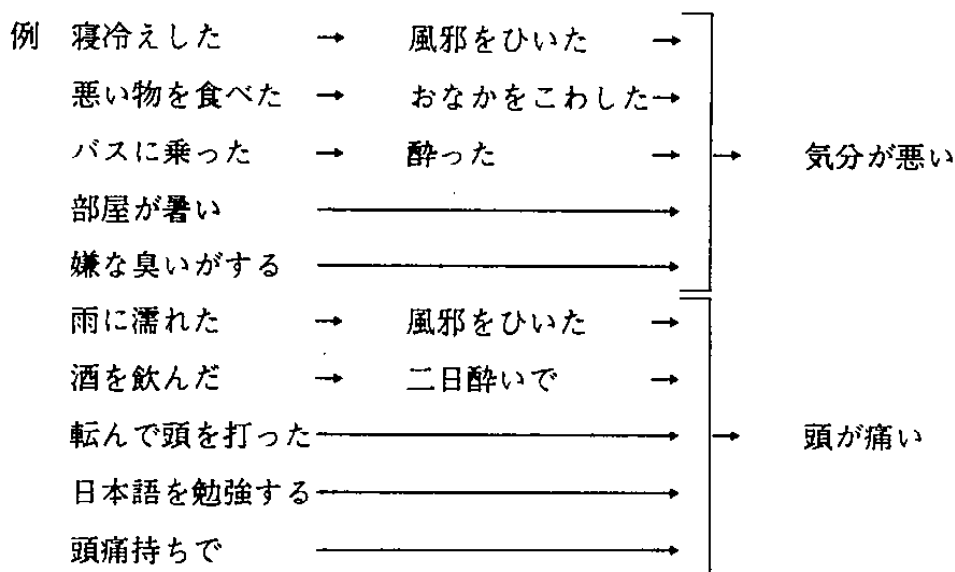
しろ、態度・仕種等の指導にも心掛けたい。

【3】応用

① 症状の訴え方の練習をする

会話番号3・4について、その意義の確認をして、症状の訴え・その受け答えについて、応用表現を練習する。

「気分が悪い」については、病気の症状の言い方の一つとして提示する。その原因などとも関連させて練習しておく、類似の場面で役立つだろう。また、「あ、そりゃ、いけませんね」も併せて練習しておく。



例 A： ちょっと、気分が悪いんですが。

B： ああ、それはいけませんね。

風邪ですか。

A： いえ、バスに酔ったんです。

② 「うちに帰ってもいいですか」等自分の希望を言って、許可を願い出る表現と、それに賛成して認める表現のやり取りを練習する

具合が悪いとき等、自分がどうしたいかを申し出て許可を求める言い方と、相手の申し出に賛成して認めることを示す言い方を対話の形で練習する。説明5（教科書P45）を読んで、ここで用いる「その方がいい」の意義を確認してからやり取りの練習に入る。

例 先生： Aさん、どうしました。お疲れのようですが。

学生： 子供が熱を出しちゃったんです。

先生： あ、そりゃ、いけませんね。

学生： あのう、明日、休んでもいいでしょうか。

先生： ええ、その方がいいですね。

学生： どうもすみません。

*最後の「どうもすみません」については、学習者から「こんなときに、なぜ謝るのか」と質問が出たら、日本人の欠席等についての考え方について学習者と話し合うとよいだろう。ただし、練習後に行う。

③ 「一人で大丈夫ですか」の「で」の用法練習をする

説明6（教科書P45）を読んで、練習6-1（教科書P45）を参考にして対話練習の形で簡単に行う。

【動詞の復習 3】 教科書P39～44

*この練習については、〔会話-5〕の学習とは別に行う。機械的な変形練習なので、使用する動詞の絵カードを用意したりして、語の意義を提示しながら楽しくできるよう工夫したい。

① 動詞のテ形とこれを用いた許可の願い出の表現の練習をする

ここでは五段動詞のテ形（いわゆる「音便形」）の定着に重点を置いて、練習4-1から練習4-4までを教科書に沿って練習する。（付録 動詞の活用P197～207参照）

〔会話-6〕早退した次の日のあいさつ

行動達成目標	
体の具合が悪かったりして早退等をした場合、次回登校したときのあいさつができ、また、逆の立場でそのような友達に対してお見舞いの言葉が言える行動能力をつける。 また、「届出」の学習の総復習として、いろいろな場合の届出ができ、かつ、次回登校したときのあいさつ（報告）ができる行動能力をつける。	
知識	早退の場合も欠席の場合（〔会話-2〕のテーマ）と同様、次回登校したときあいさつ（報告）すべきことを知る。
表現	① 体の具合などがよくない相手に対す → あまり無理をしない方がいいですよ。 るいたわりの言葉（決まり文句的に用 いる）の用法を学ぶ。
現	② ①の文型「（あまり）～ない方がいい → （食べ）ない方がいいですよ。 い」を使って相手に何かをしないよう あまり（たばこを吸わ）ない方がいい

表 現	にさせる（禁止・忠告・勧め等）言い、 方を学ぶ。ですよ。
--------	---------------------------------

● 指導の前に

学校や職場等を自分や家族の体の具合が悪くて休んだり、早退して、次に登校(出勤)したときに、担任や上司にあいさつ(報告)することは〔会話-2〕で学んだ。ここでは、それが徹底できることに加えて、クラスや職場で、級友や同僚といたわり合いのコミュニケーションを通じてよい人間関係を作っていけるようにしたい。

● 準備

- ① 模擬場面テストに備えて、学習者のそれぞれに届出、報告すべき内容（子供が熱を出して教室に行けない／明日、外国人登録に行く／昨日、おなかが痛くて早退したが、今はもうすっかり直った等）を示し、これまで学習したことを応用して、届出・報告ができるようにしてくるよう指示を出しておく。

各学習者には、該当場面の対話例をテープに入れて渡しておく。

- ② 模擬場面テストのために、教授者の同僚等、届出を受ける役を担当してくれる人を探し、学習者のそれぞれに対してどう受け答えしたらよいか打ち合わせておく。また、届出にふさわしい所（事務室、教師控え室等）、方法（電話連絡、頼まれて伝言する等）等も相談し、確認しておく。

● 授業

【1】導入

- ① 学習場面の関連表現の確認をする

〔会話-5〕の【1】導入②の症状を表す言い方（P34）の意義を確認し、発音練習をする。症状は板書しておいて、次の②・④の練習で学習者に指示する際に利用する。

- ② 自分の状況を伝える文の発話練習をする

①の症状を表す言い方を用いて「まだ、少し（症状）んですが、大丈夫です」の文単位の発話練習をする。

- ③ 相手にいたわりを示す発話練習をする

「でも、あまり無理をしない方がいいですよ」の文単位の発話練習をする。

- ④ ②・③の文のロールプレイをする

②・③の文の意味については学習者に翻訳させる等して確認する。クラスの学習者を二つに分け、半分が「まだ、少し（症状）んですが、大丈夫です」と言ったら、残りの半分が「でも、あまり無理しない方がいいですよ」と受ける練習をする。次に学習者二人を指名して、同様に受け答えの練習をする。

【2】展開

① 会話場面を通しての発話練習をする

〔会話－6〕のテープを通して聞いて対話のスピードや間の取り方をまねる。

② 会話場面のロールプレイをする

学習者二人で練習をする。

【3】発展

① 「～ない方がいいですよ」の文型練習をする

相手に何かをしないようにさせる言い方（「（あまり）～ない方がいいですよ」）を練習1－1から練習1－3（教科書P47～P48）に沿って練習する。

*この表現は、誤解を生むこともあるので、適切な場面を提示し、顔つき（ほほえみながら、真顔で、眉をしかめて）にも注意を払うことを示す。

*この練習は別に時間を取って行ってもよい。

【模擬場面テスト】

*このテストは、評価の面よりも、これまでの「届出」の学習のまとめで、実際の生活での応用力をつけることを重視したものとする。

① 学習者がしようとしている届出の仕方の確認をする

場面テストに入る前に、各学習者にどのように届出するつもりか確認し、教授者はその方法が内容にかなっているかを確認し、ふさわしくないものであれば、アドバイスする。

例 Aさんは、小学生の子供が風邪をひいて昨晚から熱を出しているので、学校を休ませたいと思う。また、Aさん自身も、（日本語）教室に行けない。

先生： Aさんは、だれに、どうやって連絡しますか。

A： 子供の担任の先生に連絡します。子供の同級生が近所に住んでいます。その子に伝言をお願いします。

- 先生：　そうですね。それがいいですね。
 欠席届も書いて、その子に渡して、持って行ってもらうといいですね。
 Aさん、（日本語）教室にはどうしますか。
- A：　ええと、欠席届を出します。
- 先生：　そうですね。でも、それは、お子さんの具合がよくなって、次に教室に来るときですね。
 今日は、電話をするといいですね。
- A：　はい。電話します。
- 先生：　授業が始まる前に、電話するんですけどね。
- A：　はい、分かりました。
- 先生：　それでは、Aさんの今日のテストは、お子さんの同級生に伝言と欠席届をお願いすることと、（日本語）教室に電話で連絡することの二つですね。がんばってください。
- A：　はい。ありがとうございます。

② 事前準備をする

それぞれの学習者の条件に合った届出ができるように、だれ（対応者：同僚の教授者等）に届出をするか伝える。学習者には、テストの順番、場所等を指示する。また、このやり取りの録音やビデオが撮れるなら、その準備をしておく。

③ テストを実施する

テストをする。教授者は、後で行う「講評」のために学習者の個々について評価をする。

④ テストの講評をする

評価は学習者のレベルに応じて届出が行えることを基準にして、細かい言い間違いは、指摘する程度にしたい。

*テストの様子を録音やビデオに撮ってあれば、これらを聞き（見）ながら、クラスで意見を出し合うといいだろう。

〔会話－7〕 隣に声をかける

行動達成目標

外出するときの隣家に対する「声かけ」が、必要なときに、適切な方法でできる行動能力をつける。あわせて、近所付き合いでのあいさつの大切さを理解する。

知識	日本社会での外出時のあいさつの習慣と、「お願いします」等慣用的な言い回しの意義等を知る。
表	① 外出時のあいさつでよく用いられる → ちょっと、出かけてきます。 右のような表現の意義を理解し、自分 → ちょっと、そこまで。 でもこれらが正しく使えるよう学ぶ。 → お願いします。 → お出かけですか。
	② 外出の理由を言う表現、「切手を買 → (買った) てくる。 ってきたいんです」の応用として「～ → (買った) てきます。 てくる/てきます」、「～に行ってく → (買い) にいってくる。 る/に行ってきます」の文型の意義と → (買い) にいってきます。 用法を学ぶ。
現	③ 大体の所要時間を言う「(時間) ぐ → (20分) ぐらいで(戻り) ます。 らいで～ます」の文型を学ぶ。

● 指導の前に

外出時の隣家に対する「声かけ」について、一般の日本人はどうしているだろうか。人、地域、住居の形態、場合等によって、声をかけるか否か一概に言えないだろう。

帰国者に対しては、日本では外出するとき、最低どんな場合には「声かけ」すべきだとされるかを指導するのがよいだろう。

まず、外出の準備中（戸閉めをしているとき等）や路上で隣家の人から声をかけられたりしたら、外出することを告げる決まり文句（あいさつ言葉）を言うべきだろう。

また、泊まりで出かける等で、隣家が心配する（不審に思う）ことが考えられるときは、行き先・期間等を知らせ、「留守中よろしく願います」旨告げるのが普通だろう。

ところで、このような「声かけ」は、隣家との人間的つながりと関係が深い。「声かけ」をする前提としては、普段から隣家と対話がなければならない。帰国者家族は何らかの形で隣人から注意を向けられることが多いだろう。特に、地方で生活する場合はこれが強いだろう。日本語が不自由だったりして面倒な面もあろうが、最低限必要なこの種の「あいさつ」を通じてよい隣人関係を作る努力は定着の上で、大事なことだろう。

ここでは、それぞれの場合に応じた「声かけ」の方法を指導しながら、隣人との「よい関係」を作る「声かけ」の必要を理解させることを目標としたい。

● 準備

- ① 外出しようと、ドアにかぎをかけている林さん（ご主人と奥さんどちらも）と玄関から出てきた隣家の人が顔を合わせている絵（教科書P48のようなもの）を用意しておく。
- ② アパートのドア口のような場所があったら、場面練習をするときに使用できるようにしておく。また、かぎ、買物かご等の小道具を用意しておく。

● 授業

【1】導入

- ① 学習場面に関連した質問による動機付けをする

準備しておいた絵を示して、学習者に次のような質問をする。

例 ・外出のとき、隣の人に「声かけ」するか。帰宅したときはどうか。普段は、どんなときに隣の人にあいさつや話をするか。

・中国ではどんなときに、外出の「声かけ」をするか。帰宅のあいさつはどうか。中国語でこれらのあいさつは何と言うのか。日本ではどう言うか。知っている言い方はどんなものか。

- ② 学習内容を質問によって提示する

①の絵を示しながら、隣の人から「お出かけですか」と声をかけられたら何と言うか。教授者が学習者一人一人に声をかけて、学習者がこれに答える。

- ③ 会話場面の内容理解の確認をする

〔会話－7〕の語彙・表現の意味の確認、発音の練習をする。

*中国でも外出時の声かけはあいさつ表現となっているが、会話番号1の「すみません」「お願いします」について、中国で生活してきた学習者にとってとくに意義が理解しにくいものだろう。「なぜ謝るのか」「何をお願いするのか」「お願いされたらどうしたらいいのか」等、疑問に思う学習者もあるだろう。この場では、外出のあいさつの決まり文句だと答えればよいが、これらの言葉に表れた日本人の価値観について話し合う機会を持ちたい。

【2】展開

- ① 会話場面の理解と発話練習をする

〔会話－7〕のテープを通して聞いて内容の理解を確認した後、文単位でテープについて発話の練習をする。

- ② 発話練習をする

テープを聞きながら、学習者は林さんの部分だけ発話する。

次に、斉藤さんの部分だけ発話する。

③ 外出のきまり文句のあいさつのロールプレイをする

学習者二人一組で、会話番号1、2「はい」までをロールプレイする。ただし初めに、(会話番号1の前に) 斉藤さんに「あ、林さん、お出かけですか」と言わせる。

④ 外出の内容の問答をロールプレイする

同様に、会話番号2「買い物ですか」から終わりまでをロールプレイする。

【3】応用

① 外出時のあいさつの型の提示と練習をする

次の場面での練習に備えて、いろいろな理由で外出時のあいさつをする練習をする。この際、教授者は次のようなやり取りを提示する(板書してもよい)とよいだろう。

例 斉藤:

お出かけですか。
お買い物(お使い)ですか。
どちらへ。

林: はい。(ちょっと)

そこまで		
場所	スーパー/八百屋(さん)	へ
	/クリーニング屋(さん)	(まで)
	/郵便局/公園	(行ってきます)。
用件	お使い/買い物/クリーニング(手紙)を出し	に

斉藤: ああ、そうですか。

林: お願いします。

斉藤: はい。行ってらっしゃい。

林: 行ってきます。

*レベル1の学習者は、声をかけられたら「はい。(ちょっと)」とにこやかに言えればよい。また、先に「こんにちは」等一般のあいさつをしてもよいとする。

② 外出時のあいさつ場面(応用)のロールプレイをする

教授者は各学習者にそれぞれ別の外出の理由を示し、学習者同士、外出のあいさつをするという場面練習を行う。

*練習を行う場所や小道具等にも配慮して、なるべく実際の形に近くする。ここでも、教科書のとおりに行うことを目指すのではなく、あいさつとしての会話の流れを大切にしたい。初めに、同僚の教授者に頼んで二人で例を示すとよい。

【4】発展

① 「動詞+てくる（てきます）」 「動詞+に行ってくる（に行ってきます）」の意義と用法の練習をする

説明1と練習1-1、練習1-2(教科書P49~50)に沿って練習をする。

ただし、それぞれの形の練習をする場合でも、用例を示したりして具体的な用法を身につけさせたい。

例 取る→取ってきます→取りに行ってきます

先生： (教室に来て、チョーク箱を見て) あれ、赤いチョークないかな。

学生： あっすみません。

事務室から取ってきます。

(事務室へ、取りに行ってきます。)

② 「～ぐらいで」の意義・用法の練習をする

だいたい の所用時間(期間)を示すときに用いられる「～ぐらいで」の意義と用法について、説明2、練習2-1(教科書P50)に沿って練習する。

*レベルⅡ・Ⅲの学習者に対しては、模型の時計等で、ぴったりの時間(期間)を表す「ちょうど～」と対比させて練習してもよいだろう。

〔会話-8〕自転車を借りる

<p><u>行動達成目標</u></p> <p>物を借りるときの願い出が、状況に応じて適切にできる行動能力をつける。</p>	
知識	<p>状況によって、だれに、どんな物が借りられるか。借りるとき、返すときの言い方とその際、配慮すべきこと。また、借りた物の扱い方。</p>
表現	<p>① 相手に敬意を示すため自分の行為を →お(借り)する。 謙讓表現にする「お+動詞+する」の文型について、相手の行為の尊敬表現「お+動詞+になる」の文型と区別して理解する。 また、この謙讓表現を用いて、自分 →お(借り)してもいいですか。 がしようとするに相手の許可を求</p>

表現	める言い方を学ぶ。
	② 大体の所要時間を言う「(時間)ほ → (30分)ほどで(帰ってきます)ます。どで～ます」の文型を学ぶ。

● 指導の前に

この会話は、買い物に行くのにアパートの管理人の自転車を借りる場面だが、一般の日本人ならこの会話のやり取りを聞いただけで、林さんは、管理人からこの自転車について、「空いているときは、いつでも使っていていい」と、言われていて、これまで何度も借りていることが分かる。そのような自転車を借りるときの「ことわり」である。

つまり、日本の社会で、自転車は、自由に使っていていいと何度も言われなかったら、借りようとしなないだろう。もし、急用等で使わせてもらうような場合は、理由を詳しく言ったり、厚かましいお願いであることをわびたりすることになる。

また、日本と中国との物そのものの違い、物の扱い方の違い、中国で使ったことがない等が原因でトラブルが起こることがある。

このようなトラブルをなるべく避けるよう、日本で貸し借りしやすい物としにくい物を教えたり、使い方が分からない物については借りる相手や身近な人によく聞いてなるべく試させてもらってから借りること、万一壊してしまったときの対処の仕方まで含めて指導したい。

● 準備

- ① 「借り物」の実習に使う物（自転車、自転車の空気入れ、学習者が操作しにくいテープレコーダ、工具等）を用意しておく。自転車は絵でもよい。
- ② 「借り物」実習ができるように事務室の職員や教授者に協力を依頼しておく。だれが何を借りに来るか、どう対応するか等打ち合わせておく。

● 授業

【1】導入

- ① 会話場面の内容理解の確認をする
〔会話－8〕の会話部分のテープを聞いて内容把握の確認の質問をする。
- ② 会話場面の表現の確認とこの会話の中心文型の練習をする
「自転車」「駅前」「スーパー」「30分ほど」等の語句の発音練習をし、あわせて「(自

転車) お借りしてもいいですか」の「自転車」の部分借り物ごっこに用意した物に替えて文単位の発話練習をする。

③ 学習場面に関連した質問によって動機付けをする

学習者が他人の物を借りたことがあるか。あれば、どんなときに、何を借りたか、そのときどう言ったかを発表し合う。

④ [会話-8]の場면을説明する

場面の説明をし、あわせて、物を借りるときの注意、借りた物の扱いについての注意、借りた物を壊してしまったときの処理についての注意を教授者が示し、学習者に意見を出させる。中国語を交えたりして(レベル1の学習者には中国語がより多くなる)し、しっかりと問題意識を持たせるようにしたい。(「指導の前に」参照)

*これらの提示については、実際のやり取りを模したものを、テープ(ビデオならなおよい)で聞かせるとよい。

*懐中電灯を借りて電池を消耗させたとき、のこぎりを借りて刃を欠いてしまったとき等、具体的な場면을いろいろ提示して、クラスで話し合うとよい。

【2】展開

① 会話場面を通しての発話練習をする

[会話-8]を通して聞きながら、クラスを半分に分けロールプレイする。

② 実習の語彙を確認する

「借り物」の実習用に準備した物の名称について確認、発音練習をする。

③ 物を借りる願い出のパターン練習をする

準備した物を示して、会話番号1の「自転車」の部分その物に替えて言う練習をする。

④ 行き先、所要時間の示し方のパターン練習

会話番号3について「駅前のスーパー」「30分」の部分教授者が示した言葉に替えて言う練習をする。([会話-7] の【3】①P42参照)

例 ちょっと、(A)まで 行ってきます。(B)ほどで 帰ってきますから。

A: 郵便局/市役所/郵便局の隣の写真屋/市役所の前の本屋

B: 20分/40分/50分/1時間

⑤ 会話場面を通してのロールプレイをする

④のそれぞれを学習者に割り当てて、[会話-8]を一部変えたもので学習者同士ロールプレイする。

【3】応用

① 「借り物」の実習をする

学習者それぞれに借りる物を指示し、練習した後、事務室等で「借り物」の実習をする。この際のやり取りは録音しておく。

② 「返却」の実習をする

次に、借りた物を返す。これも録音しておく。

③ 実習の講評をする

①・②の録音したものを聞きながら講評を行う。必要なら復習する。

*この際のやり取りは、言葉の面ではそれぞれの学習者のレベルに応じて「何が借りたいか」「何に使うか」「どのくらいで返せるか」が伝えられればよいこととする。ただし「すみません」「ありがとうございました」という言葉を使ったかどうか、態度は借りる側として適切かどうか等は重視する。

【4】発展

① 謙讓表現「お+動詞+する」の練習をする

謙讓表現「お+動詞+する（します）」について練習1-1（教科書P52）を参考に形を練習をし、意義（「お読みします」等は、ここでは自分から行為を申し出る言い方として、それにふさわしい場面を提示したい）を把握させ、用法を理解させる。

② 尊敬表現「お+動詞+になる」の練習をする

尊敬表現「お+動詞+になる（になります）」について練習1-2を参考に①と対比させて練習する。

*①・②の練習はレベルⅠの学習者に対しては聞き取りを重点に行い、無理に発話を要求しない。レベルⅡ・レベルⅢの学習者についても場面や文脈の中でこれらの語を示して形の練習だけでなく用法の理解にも重点を置いて行う。

③ 「～から～まで」の意義、用法の確認をする

説明2、練習2-1（教科書P52～53）を参考に①で行う。

④ 「～ほど」の意義・用法の練習をする

大体の時間を示す「～ほど」について、「～ぐらい」と同様のものとして用法を理解させる。

*レベルⅠの学習者に対しては、もし、使う指導をするなら「～ぐらい」を主とし、「～ほど」は理解できればよいとする。